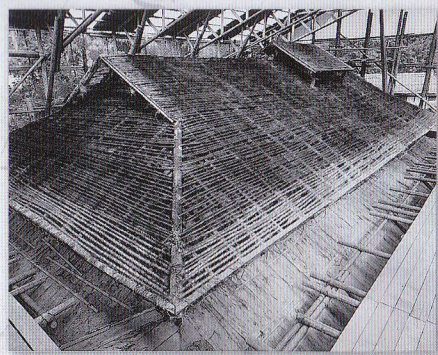


行永家住宅

当家は元和年間（七世紀前半）この地に帰農したと伝えられ、天明年間（八世紀後半）から旧小倉村の庄屋を、幕末（九世紀後半）には志業組二六か村の大庄屋を務めました。

住宅は、主屋が敷地北寄りに面し、これを囲むようにして木屋（離れ）、米蔵、道具蔵、味噌蔵、新蔵が建ち並んでいます。主屋は、間口九間（18メートル）奥行五間（13メートル）、入母屋造り、棧瓦葺で、四面に棧瓦葺の庇を廻し、背面の一部には二階が設けられています。現存する瓦葺き農家として、丹後地方で最も古く、高い質を持ったものです。文政元年（一八一八）の材木購入手形、解体修理にともなうて発見された文政三年（一八一三）裏紙および文政九年の墨書、文政八年の大棟鬼瓦（裏表紙へら書など）から、準備段階から二〇年の歳月をかけて建築されたものと考えられます。

土間は「六本組」と呼ぶ太い梁組が格子状に組まれ、その上はツシシとなっています。土間に面して板敷のシモデン（玄関の間）、ダイドコロ、表奥には式台を持つナカノマ、平書院を設けたオクノマ（座敷）と、裏奥はナカヘヤとヘヤ（寝室）からなる、広間型を原型とする整形六間取りの形式です。また、大戸口を入って土間左手前は板壁囲いのマヤ（牛室）となっています。



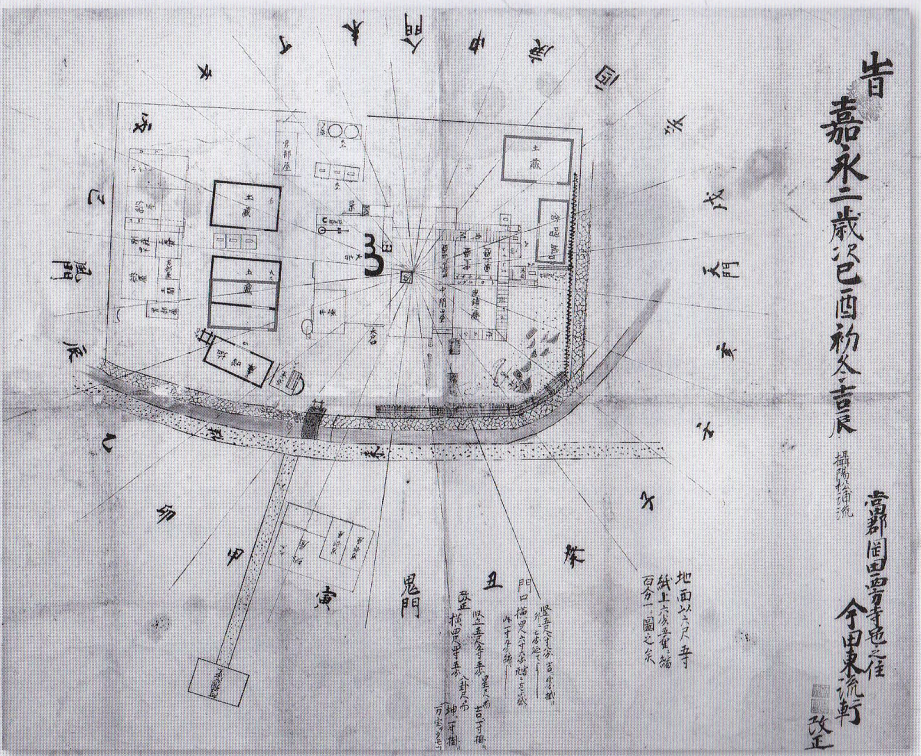
上屋竹すの野地の全景。平成12年度から14年度にかけて、解体による保存修理工事が行われました。上屋の瓦は、当初から全面的な葺き替えは行われておらず、部分的な差し替えにとどまっていた。瓦をはずし葺土と藁を取り除いた下の竹すのこも、当初のままで、その状態はたいへん良く保たれていました。



保存修理工事は、上屋軸組はそのままにして、下屋と附属建物を全解体する内容で修理が行われました。手前ダイドコロ中央には囲炉裏が構築され、軸組は、太い柱と胴差しなどで整然と頑丈に組固められていました。当初、ダイドコロと隣室のシモデンは一部屋の広間でした。



道具蔵と新蔵は主屋とほぼ同時期、木屋、米蔵と味噌蔵は、明治初年の建築と考えられていますが、主屋とともに江戸後期の屋敷の佇まいを良く残しています。



嘉永2年（1849）の家相図。江戸後期の屋敷地の形状と主家や附属建物の配置が良く分かります。方位や家の吉凶が記されています。

主屋は全体的に簡素な造りですが、豪壮な土間の梁組に幕末期の発達した大工技術の粋がみられます。建築年代が明らかで、住宅平面の発達段階を知る上で重要な発展広間型民家の代表的な遺例です。また同時期の蔵や木屋など附属屋を残す貴重な農家屋敷構でもあります。

